

# 狩野永梢について

五十嵐 公一

## はじめに

京狩野家は狩野山楽(1559～1635)から始まり、狩野山雪(1590～1651)が二代、狩野永納(1631～97)が三代の当主を務めた<sup>1</sup>。『古画備考』所収の京狩野家の系図にもあるように、その永納には二人の息子がいた。長男は四代当主を務めた狩野永敬(1662～1702)、二男が狩野永梢である。

このうち狩野永敬は実相院障壁画など注目すべき作品を残していること、絵師・高田敬輔の師であることなどもあり、以前から注目されてきた<sup>2</sup>。拙稿「狩野永敬の研究」はその永敬の活動を明らかにしようとしたものであり<sup>3</sup>、それ以降も永敬については史料と作品に基づいた着実な研究の蓄積が続いている<sup>4</sup>。

ところが、狩野永梢はほとんど注目されてこなかった。『本朝古今書画便覧』(文化15年<1818>刊)に「狩野山静ノ二男、松之尉ト称ス、東本願寺絵所」とある。この狩野山静とは永納のことだから、永梢は永納の二男で「松之尉」と称し、「東本願寺絵所」となったことがここから分かる。また『東洋美術大鑑』(審美書院)には「永梢は通称松之尉、別に家を成し、東本願寺の絵所たり。その子に内匠永雪あり」とあり、永梢の子に「内匠永雪」がいたとある。しかし、これ以上のことを教えてくれる基本史料が知られていない。

そのため、永梢についての研究は実に少ない。永梢が描いた奈良市・徳融寺障壁画を紹介した木村重圭「徳融寺(奈良市)の障壁画―狩野永梢・勝山琢眼の襖絵―」<sup>5</sup>、狩野永納と二条家との関係の中で永梢にも触れた拙稿「狩野永納と二条家」<sup>6</sup>、京狩野家全体について論じた脇坂淳『京狩野家の研究』のうち永梢について記した部分があるくらいである<sup>7</sup>。

その狩野永梢について、確認できた史料と作品を紹介するのが本論の目的である。ただ、最初にことわっておくと、永梢については生没年が確定できる史料がまだ見つかっていない。京狩野家の基礎史料である『浄慶寺過去帳』にもこれが分かる記録がない<sup>8</sup>。永梢の兄・狩野永敬が寛文2年(1662)生まれだから、それ以降に生まれたことが分かるだけである。

また、永梢が東本願寺絵所となってから後の記録も確認できていない。そのためここで紹介できるのは、永梢についての一部でしかない。それでも本論を起すのは、永梢は京狩野家にとって重要な役割を果たした可能性が高い絵師であり、興味深い作品を残しているからである。本論が契機となり永梢の解明が進むことを望みたい。

## 永納の家督移譲

狩野永梢は、京狩野家三代の狩野永納の二男である。その永納は54歳だった貞享元年(1684)の6月下旬頃、京狩野家の家督を23歳の長男・狩野永敬に譲っている。その家督移譲直前の4月26日、永納は京都を立ち、天の橋立、若狭の小浜周辺をめぐる旅に出た。帰京したのは5月29日。人生の節目にするつもりだったのか、一か月程の旅をしたのである。そして、その時のことを、翌年の貞享2年に「鳥跡記」(『文苑雑纂』)という紀行文にして残している<sup>9</sup>。その「鳥跡記」の最終部分で、帰京した時のことが次の様に記されている。

かくても日もかたふきぬる比、今出川といふよりかへりぬ。事ゆへなくかへりぬるよろこひ、草の窓のうちしつかにすみな

し、永敬ハ絵の事何くれとのへける。永庸ハ、文の道のつとめをかたる。老の後のおもひて、此ほかなにかハとのミ。

永納が帰京すると、すぐに永敬が絵についての話をしてきたというのである（「永敬ハ絵の事何くれとのへける」）。この時、永敬には京狩野家当主となる自覚ができていたようだ。一か月ぶりに会った父と絵について話がしたかったのだろう。また、永庸は学問のことを話したという（「永庸ハ、文の道のつとめをかたる」）。

いま注目したいは、この永庸である。「鳥跡記」（『文苑雜纂』）には確かに永庸と記されている。しかし、これは永梢のことなのかもしれない<sup>10</sup>。永納には永敬と永梢の他に息子がいたという記録がないからである。永納には万治元年（1658）閏12月23日に22歳で亡くなった狩野乗信（酒造助）という弟がいて、その乗信には狩野常貞という息子がいた<sup>11</sup>。永納にとっては甥になる。この常貞を永納は育てていたようだから、この永庸は常貞のことなのかもしれない。しかし、これを永梢のことだと考えた場合、これは永梢に関する最も早い時期の記録になる。この時、永敬は23歳だから、永梢の年齢はそれ以下ということになる。

## 二条家新御殿の障壁画制作

貞享元年（1684）、狩野永納が長男・狩野永敬に家督移譲した後、永敬が京狩野家当主としての役割を担ってゆく。永納の公儀名「縫殿助」も、永敬が名乗るようになった<sup>12</sup>。

その永敬が京狩野家当主となった後の動向の一部が、二条家の記録『二条家内々御番所日次記』（慶應義塾図書館）から分かる<sup>13</sup>。なぜ『二条家内々御番所日次記』に永敬の記録があるのかといえば、京狩野家初代・狩野山楽、二代・狩野山雪が九条幸家に命を救われている。それにより京狩野家と九条家との関係が更に深くなった。そして、その幸家の長男が二条家の養子となったため、京狩野家は二条家にも出入りするようになった。『二条家内々御番所日次記』に永敬の記

録があるのは、このような事情があったからである。

その『二条家内々御番所日次記』の貞享3年9月16日条以下に注目したい記録がある。二条綱平が霊元天皇の皇女・栄子内親王を室として迎えることになり、二条家に新御殿が建てられた。その障壁画制作が京狩野家に命ぜられたのである。これに関わる記録を『二条家内々御番所日次記』から全て抜粋したのが史料1である<sup>14</sup>。

貞享3年9月16日、永納と縫殿助（永敬）が二条家に召され、「女二宮様新作之御殿」の「御絵之義」つまり障壁画制作が仰せ付けられた。しかし、永納はこれに関与せず、永敬が中心となって障壁画制作を行った。この時点での京狩野家当主は永敬だったからである。永納はこの仕事を辞退し、二条家もそれを許したわけである。そこで9月20日、「新御殿絵間下書」つまり下絵を永敬が二条家に見せに来る。そして9月23日、「狩野松之丞」が二条家に参上した。先に見た通り、『本朝古今書画便覧』に永梢は「松之尉」と称したとあるから、この「松之丞」は永敬の弟・永梢だと見てよい<sup>15</sup>。ちなみに、この9月23日条が『二条家内々御番所日次記』での永梢の初出である。永梢が二条家に挨拶に来たわけである。

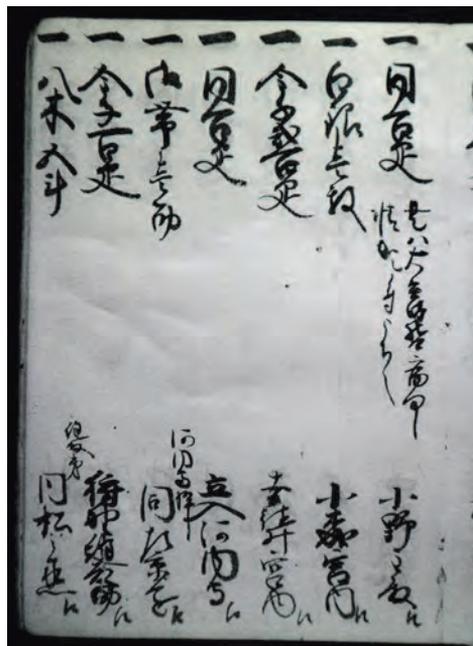


図1 『二条家内々御番所日次記』 元禄6年12月9日条

ところが、史料1にはこの仕事で永敬を助けた「木村何遠」という人物が頻繁に出てくる。10月4日条に「自今朝、狩野何遠、同弟子来」、10月5日条には「木村何遠弟子等来」とあるから、この木村何遠は「狩野何遠」とも称していたようだ。この木村何遠が木村姓と同時に狩野姓も称しているということについて想起したいのは、狩野山楽の父が木村永光だという点である(『本朝画史』)。山楽は狩野永徳の門人となり狩野姓を許されたのだが、その本姓は木村である。従って、この木村何遠は京狩野家の血縁者だと考えて間違いないようだ。

では、この木村何遠とは何者なのか。ここで想起したいのは、先にも出てきた狩野常貞である。これが狩野永納の弟・狩野乗信の息子だと考えると無理なく理解できるのだが、問題となる記録が一つある。10月6日条の「縫殿弟木村何遠弟子等来」(図2)である。この木村何遠は「縫殿弟」つまり永敬の弟だということである。そこで、この木村何遠に注目して史料1を読み込むと、『二条家内々御番所日次記』では「木村何遠」と「狩野松之丞」が同じ日に出てこないことに気づく。見事に二人は同じ日に出てこない。もちろん、狩野永敬には永梢以外に弟がいたという記録がない。そうすると、この木村何遠が

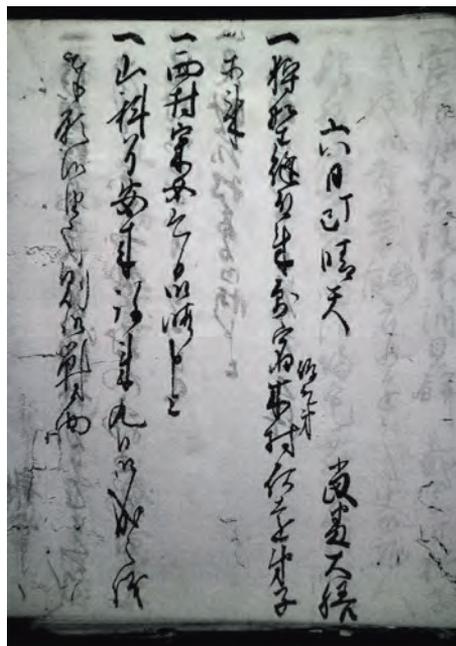


図2 『二条家内々御番所日次記』 貞享3年10月6日条

永梢である可能性が出てくる<sup>16</sup>。

まずはこのような可能性もあることを踏まえ、史料1を時間の経緯に従って見てゆく。貞享3年9月20日、永敬が下絵を二条家に提出。9月23日に永梢が二条家に参上した。それ以降、永敬と永梢は頻繁に二条家に参上するようになる。京狩野家の弟子たちも動員され、障壁画制作が行われた。9月26日、28日、10月3日、6日、10日、11日、13日、14日、16日には永敬や永梢が二条家に宿泊して制作した。そして10月22日、障壁画は完成したようだ。この日に永敬が「銀子五枚」を受け取っていることからそれが分かる。これがこの仕事への対価の一部だったと思われる。

こうして見てくると、これは制作期間の短い仕事だったことが分かる。9月16日に障壁画制作が仰せ付けられ、すぐに仕事に着手。10月22日には完成しているからである。栄子内親王が二条家に入ったのは11月26日だったことが知られている。永敬には、これに間に合わせる事が求められたわけである。この時、永敬は25歳。難しい仕事を任された永敬にとって、弟・永梢は頼りになる存在だったと思われる。

## 二条家の記録

それ以降、京狩野家の当主である永敬と同じく、永梢も二条家に頻繁に出入りするようになる。史料2は『二条家内々御番所日次記』で貞享3年(1686)10月22日以降に出てくる永梢、そして永梢の可能性のある何遠の記録を全て拾ったものである。これらから興味深い事実が読み取れる。

貞享4年6月15日条から、永敬と永梢に「屏風之絵御用」が仰せつけられたことが分かる。また元禄2年(1689)11月9日条から、永敬と永梢が命ぜられて「紙帳之鶴」を描いたことが分かる。鶴亀松竹のめでたい図柄だったようだ。先に見た貞享3年の新御殿障壁画制作により、二人は二条家の信頼を得た。父・狩野永納と同じく、二条家から絵画制作の仕事を得るようになったのである。

そして、史料2から分かるように、永梢は頻繁に二条家に出

入りした。幾度も永梢単独で二条綱平に伺候している。綱平と馬が合ったのか、召出も多かったようだ。そのような記録の中で、特に注目したいものがある。元禄6年9月14日条「今夜御伽立入河内守、秦九琳、狩野松之丞、尾形真省、座頭政都、織部、狩野新三郎来、夜半之節座頭福長来」と同年12月16日条「狩野松之丞、尾形深省、立入河内守、瀬尾全庵」である。永梢が複数の人物たちと綱平に伺候した記録だが、この中に「尾形真省」「尾形深省」の名がある。これは尾形乾山のことである。

以前、『二條家内々御番所日次記』元禄15年4月4日条「深省、縫殿、依召来、於御前御酒被下也」に注目し、狩野永敬と乾山に面識があったことを指摘した。実は、その日から約五ヵ月後の9月18日に永敬は没してしまうのだが、永敬と乾山に面識があったことにより、永敬没後に永敬の弟子が乾山焼の絵付けに関わるようになった可能性も指摘した<sup>17</sup>。ところが先に見た元禄6年9月14日条と16日条の記録から、永梢と乾山には元禄15年より相当前から面識があったということになる。

乾山が鳴滝泉谷の二条家山屋敷を拝領したのは元禄7年8月。そこで焼物商売を始めるための許可を得たのは元禄12年3月、そして初窯に成功して「乾山焼」と称するようになるのが元禄12年11月である。永梢はそれ以前の乾山と面識があったわけである。このことは乾山について考えてゆく上での史料になるのではないだろうか。

## 仁和寺と二条家

見てきたように、永梢は二条家に頻繁に出入りした。そこで永敬とともに作画を命ぜられることもあった。この点については、興味深い別の記録がある。仁和寺の記録『御室御記』である。その元禄4年(1691)に永梢が登場する。その全てを抜粋したのが**史料3**である。

元禄4年9月22日、狩野縫殿(永敬)と松之丞(永梢)が仁和寺に來た。そして25日、永敬に絵画制作の仰せ付けがあった。その翌日から、永敬と永梢が仁和寺に出入りする。そし

て30日までに二人は絵を仕上げた。

更に10月2日、永敬と永梢に押絵制作等の仰せ付けがあった。これも、早々に仕上げたのだろう。7日には永敬と永梢に金子が与えられ、11日には永梢が御礼のため仁和寺に参上した。つまり仁和寺からも永敬と永梢が絵画制作を命ぜられたわけである。**史料2**から分かるように、この元禄4年、永梢は二条家に頻繁に出入りしている。永梢は二条家と仁和寺に出入りしながら、絵画制作をしていたということになる。

その永梢だが、『二條家内々御番所日次記』では元禄6年12月26日に登場するのが最後である。確認した限り、それ以降の記録が見つからない。では永梢はどうなったのだろうか。そこで気になるのが、『本朝古今書画便覧』『東洋美術大鑑』などにある永梢が「東本願寺絵所」となったという記録である。東本願寺絵所となったことが『二條家内々御番所日次記』に永梢が出てこなくなる理由だと考えれば、この点について一応の納得はできる。しかし、納得しがたい部分もある。

永梢が東本願寺絵所となった理由として、先ず考えられるのは京狩野家の菩提寺である浄慶寺が東本願寺派だという点である。間違いなく、これは大きな要因だったはずである。しかし、それ以上に注目したいのは、京狩野家と関係が深かった九条家と東本願寺の関係である。狩野山楽、山雪の命を救い、京狩野家と九条家の関係を作った九条幸家の娘に、東本願寺13世・宣如(光從)の室となった成等院がいる。宣如は東本願寺12世・教如(光寿)の実子である。また、九条幸家の二男で九条家当主となった九条道房の娘に、東本願寺14世・常如(光晴)の室となった光応院がいる。このような九条家と東本願寺の深い関係は、永梢が東本願寺絵所となる際に何らかの役割を果たしたと想像できる。そうであるなら、永梢が東本願寺絵所となった後も、永梢と二条家の関係は続いたはずである。そのため、元禄6年12月26日以降、『二條家内々御番所日次記』で永梢が出てこなくなる理由にはならないのである。この点については、新たな史料が出てきた時に考える必要がありそうだ。

## 永梢の作品

永梢について史料から分かるのは以上である。ここからは永梢の作品に注目したい。冒頭で触れたが、これまでに永梢の作品として奈良市・徳融寺障壁画が紹介されている<sup>18</sup>。この徳融寺方丈には「永梢」(白文方印)のある「竹林七賢図」、「狩野永梢筆」の署名と「永梢」(朱文鼎印)、判読不明の朱文方印のある「雪松洋狗図」、「狩野永梢筆」の署名と「永梢」(朱文鼎印)、判読不明の朱文方印のある「白梅鴛鴦図」がある。その徳融寺の客殿には「方丈建立元禄五年良儀能建瓦葺再建享保元稔種冬二節」という棟札があり、ここから方丈は元禄5年(1692)の建立であることが分かる。そこで、障壁画もこの頃に描かれたものだと見られている<sup>19</sup>。

このうち「竹林七賢図」には、鹿が曳く二輪車と拱手する賢人が描かれている。この図については、永梢の祖父・狩野山雪が描いた天球院の「山水人物図」、永梢の兄・狩野永敬の門人・高田敬輔が描いた作品を版本にした『敬輔画譜』に似た図が見られるという指摘がある<sup>20</sup>。京狩野家に伝わった図像を使って描かれたことが分かり興味深い。

この徳融寺障壁画以外の作品としては、「狩野永梢筆」の署名と「永梢」(朱文鼎印)をもつ紙本著色「白衣観音図」(図3・4)を担当した展覧会で紹介したことがある<sup>21</sup>。あまり状態のよくない作品だが、これは滝を見る白衣観音を描いたもの。白色と黄色の顔料を使い、衣を立体的に描く工夫をしているのが分かる。

この他にも永梢の作品がある。以下は、初めて紹介される作品だと思われる。まず、「狩野永梢筆」の署名と「永梢」(白文方印)をもつ絹本著色「七福神図」(図5・6)。歌って踊る七福神が描かれている。見ていて楽しくなる作品である。白色の顔料(胡粉)を使い、衣に立体感を出そうとする表現は「白衣観音図」でも見られた表現である。永梢の父・狩野永納が「滑稽図絵巻」を描いているが<sup>22</sup>、それとの関係で理解すべき作品だと思われる。

また、いずれも「狩野永梢筆」の署名と「永梢」(白文方印)、「李寛」(白文方印)をもつ紙本著色「竹雀図」(図7)、



図3 狩野永梢 白衣観音図



図4



図5 狩野永梢 七福神図



図6

「鶉図」(図8)、「尾長鳥図」(図9・10)がある。作品の状態がよくないが、ほぼ同じ法量(113.0×46.5センチ)の花鳥画である。表具も同一であり、当初から一具として描かれたものと思われる。画面を見ると、「竹雀図」の雀が丁寧に描かれている。それだけではなく筍の描写も繊細。また竹は彩色の違いにより立体感を感じさせる描き方がなされていて、笹は細い葉脈までも描かれている。また、百合は鮮やかで、花卉と葉には細い線が施され、彩色にも変化がつけられている。「鶉図」でも鶉の描写は細かい。それに加え、よく見ると小さく蜻蛉、蝶、蟻螂が描かれている。また、萩は花卉も葉も淡い色調が微妙に変えられている。永梢は花鳥画を得意とする絵師だったようだ。

また、ここで注目したいのは、永梢が「李寛」(白文方印)を使っている点である。この印の意味は分からない。永梢の兄・狩野永敬は「筆意在先」の円印を使っていたことが知られているが、この永梢の「李寛」の印にも何か意味があったと思われる。李寛といえば中国の画家の李成と范寛を想起するのだが、永梢がこの二人をどのように見ていたのか残念ながら

分からない。また、なぜ李成と范寛なのかも現時点では分からない。この印の意味は今後の課題である。

そして現在までに確認できた限りだが、永梢の最優品が二曲一隻の「草花図屏風」(図11)である。画面は五紙を継いで作られていて、「狩野永梢筆」の署名と「狩埜」(朱文方印)、「李寛」(朱白文方印)がある。画面には金泥が刷かれている。描かれているのは、水辺の菊、芙蓉、竜胆などである。よく見ると、菊など花卉は胡粉で盛り上げられている。また、葉脈まで丁寧に描かれ、葉には見事な彩色で陰影がつけられている。また、変色した葉の様子までも見事に描かれている(図12～15)。永梢の実力を示す作品である。

この作品を考える上で参考になりそうなのは、永梢の父・狩野永納が描いた「菊水図屏風」、「十二カ月歌意図屏風」、「十二カ月花木図屏風」(京都国立博物館)などの花木図である。胡粉で盛り上げた花卉は「菊水図屏風」でも見られる。また、花や葉の描き方は「十二カ月歌意図屏風」「十二カ月花木図屏風」で見られるものである。永梢の兄・狩野永敬の「草花図屏風」、「十二カ月歌意図屏風」(京都府立総合資料館)



图7 狩野永梢 竹雀图



图8 狩野永梢 鶉图



图9 狩野永梢 尾長鳥图



图10



图11 狩野永梢 草花園屏風



图12



图13



图14



图15

は永納の花鳥画を学んだものだと指摘したことがあるが<sup>23</sup>、このことは永梢でもあてはまるということになる<sup>24</sup>。

## おわりに

以上、狩野永梢について考えてきた。『二条家内々御番所日次記』『御室御記』から分かるように、若い頃の永梢は兄・狩野永敬とともに絵画制作の仕事をした。永梢が永敬を助けていた。ところが、永梢の記録は元禄6年(1693)までしか確認できない。そのため、その後の永梢の動向が分からない。東本願寺絵所になったとされるが、その具体的な活動が分からない。永梢については、まだ分からないことが多いのである。

ただ、その永梢は興味深い作品を残している。特に「草花図屏風」は優品である。確認できた作品から判断する限り、永梢は花鳥画を得意としていたようだ。父・狩野永納に基礎を叩き込まれたとようだ。この永梢に関する情報が集積されてゆくと、京狩野家の実態、更には江戸時代前期の京都画壇の様子ももう少し明らかとなるだろう。その意味でも永梢はもっと注目されてよい絵師なのである。

附記：ここで紹介した狩野永梢の作品の多くを木村和男氏にご教示いただきました。末筆ながら感謝いたします。なお、本研究はJSPS科研費JP16K02286の成果の一部です。

## 史料編

### 史料1

『二条家内々御番所日次記』(慶應義塾図書館)

貞享3年(1686)

- 9月16日 「依召絵師狩野永納、同縫殿助来、是今度女二宮様新作之御殿御絵之義仰被付也」
- 9月20日 「夜入狩野縫殿助永敬来、今度仰被付候新御殿絵間下書御覽為可有之也、則持参」
- 9月23日 「狩野松之丞来」
- 9月24日 「狩野永納、同永敬来」
- 9月25日 「狩野縫殿助来」
- 9月26日 「画師狩野縫殿助来、則止宿」
- 9月27日 「狩野松之丞来」
- 9月28日 「狩野縫殿助来、則宿」
- 9月29日 「及晩而狩野永敬暇申上退出」
- 10月1日 「(前略)田中数馬、雲益、山科了安、林意泉、狩野縫殿(後略)」
- 10月2日 「狩野縫殿、同弟子等来」
- 10月3日 「狩野縫殿来、則宿」「狩野松之丞、同弟子来」
- 10月4日 「自今朝、狩野何遠、同弟子来」「狩野縫殿助及晩而帰宅」
- 10月5日 「木村何遠弟子等来」
- 10月6日 「狩野縫殿来、則宿、縫殿弟木村何遠弟子等来」
- 10月7日 「狩野松之丞、同弟子門人来」「狩野縫殿助今晚帰参」
- 10月8日 「狩野縫殿、同松之丞弟子老人来」
- 10月9日 「狩野永敬岡崎江御供、則宿」「木村何遠来」
- 10月10日 「木村何遠来」「狩野縫殿助逗留」
- 10月11日 「木村何遠来、則止宿初度」「狩野縫殿助今晚帰宅」
- 10月12日 「木村何遠帰宅」「狩野縫殿御理申上不参」
- 10月13日 「狩野永納ヨリ古柿五十 新柿五十 壱籠進上之」「狩野縫殿、同松之丞来永敬宿」
- 10月14日 「狩野松之丞来、同縫殿逗留」
- 10月15日 「狩野縫殿、同松之丞御暇申上」
- 10月16日 「狩野縫殿助来則宿、同松之丞来」
- 10月17日 「狩野縫殿助永敬從此日逗留及暮帰宅」「木村何遠来」
- 10月18日 「木村何遠從此日逗留及晩而帰宅」
- 10月22日 「狩野縫殿助江銀子五枚被遣也、是今度新御殿之絵被仰付之故也」

### 史料2

『二条家内々御番所日次記』(慶應義塾図書館)

貞享3年(1686)

- 10月27日 「木村何遠夜入為見廻来、則宿」

- 10月28日 「木村何遠御暇申上」
- 11月 8日 「木村何遠来、則対面」
- 11月 9日 「木村何遠今昼御暇申上」
- 貞享4年(1687)
- 4月 5日 「木村何遠来」
- 4月18日 「木村何遠来為御見廻也、則御対面」
- 5月21日 「木村何遠来、御対面以後退出」
- 5月29日 「木村何遠、永敬弟子半兵衛来」
- 6月 1日 「御礼之人々(中略)狩野縫殿、同松之丞半兵衛来兩人者此間繪図写也(後略)」
- 6月12日 「狩野永敬来宿被仰付、木村何遠来及暮歸、是御屏風之繪被仰付故」
- 6月13日 「木村何遠来、入暮退出」
- 6月15日 「狩野永敬、同松之丞来、是御屏風之繪御用」
- 6月16日 「隨召来人々、木村何遠(後略)」
- 6月19日 「召隨木村何遠来」
- 6月20日 「何遠宿、淨福寺雲悉重来宿」
- 6月21日 「何遠、重都御暇申上」
- 6月22日 「狩野永敬宿、木村何遠 宿、雲悉御契約来」
- 6月23日 「何遠、雲悉(後略)」
- 7月23日 「木村何遠盆之為御礼来、追付退出」
- 8月 6日 「木村何遠今朝御暇申上」
- 元禄2年(1689)
- 10月 1日 「御礼之人々(中略)立入河内、狩野縫殿、同松之丞(後略)」
- 10月24日 「立入河内、松永道樹、安宅吉之丞(中略)狩野松之丞、三輪都来ル」
- 11月 1日 「狩野松之丞、山科了安晚来、則止宿」
- 11月 4日 「林意泉、松永道樹、狩野縫殿、松之丞逗留」
- 11月 5日 「狩野松之丞逗留」
- 11月 7日 「狩野松之丞、越九愍逗留」「越九愍退出、了安并松之丞宿直」
- 11月 9日 「狩野縫殿助、同松之丞、紙帳之鶴兩人書之鶴龜松竹」
- 11月14日 「九愍逗留、狩野松之丞今朝来」
- 11月16日 「松之丞、九愍逗留」
- 11月21日 「瀬尾宗覚、狩野松之丞(中略)狩野永納より鳴一進上」
- 11月24日 「山科了安、立入河内、狩野松之丞、越九愍、秦九林、瀬尾宗覚」
- 11月29日 「三輪都、松之丞滞留」
- 11月30日 「狩野松之丞入夜御暇申上」
- 12月 2日 「九琳、三輪都、吉之進、松之丞徒夜前止宿」
- 12月 3日 「(前略)三輪都、松之丞逗留」
- 12月 4日 「(前略)吉之進、三輪都、松之丞逗留」
- 12月 5日 「吉之進、松之丞逗留(後略)」  
「吉之進、松之丞へ鱧巻本宛被下」
- 12月 6日 「松之丞逗留」
- 12月 7日 「吉之進、松之丞逗留」
- 12月 9日 「秦九林、三輪都、狩野松之丞宿」
- 12月11日 「(前略)松之丞逗留」
- 12月12日 「松之丞逗留」
- 12月13日 「松之丞逗留」
- 12月14日 「(前略)松之丞止宿」
- 12月16日 「松之丞、九愍、三輪都逗留」
- 元禄3年(1690)
- 1月 1日 「御礼之人々(中略)狩野松之丞」
- 1月19日 「狩野松之丞入夜来」
- 1月21日 「狩野松之丞退出、伊藤宗泉入夜来」
- 1月26日 「狩野松之丞逗留」
- 1月27日 「松之丞逗留」
- 1月29日 「狩野松之丞退下」
- 2月 1日 「山科宗賀(中略)速水長門守、狩野縫殿、同松之丞則逗留」
- 2月15日 「三輪都、秦九琳(中略)狩野松之丞、松永道樹」
- 2月24日 「狩野松之丞」
- 3月16日 「狩野松之丞逗留」
- 3月17日 「狩野松之丞退出、林意泉」
- 4月 4日 「狩野松之丞、三輪都退出」
- 4月13日 「立入河内、九愍、宗泉、道樹、松之丞、縫殿、吉之丞、座頭四人」
- 4月15日 「(前略)狩野松之丞、越九愍」
- 4月16日 「今朝加茂へ御成(中略)九愍、松之丞被召連也」
- 5月18日 「狩野松之丞、三輪都、佐豫都」
- 6月16日 「瀬尾宗覚、林意泉、三輪都、松永道樹、越九愍、狩野縫殿、同松之丞、立入河内守」
- 6月25日 「(前略)為御伽、松永道樹、狩野松之丞、三輪都、佐豫都」
- 7月13日 「伊藤宗泉、狩野松之丞(中略)狩野縫殿」
- 7月26日 「狩野松之丞依召来」
- 8月 6日 「秦九琳 依召来狩野松之丞」
- 8月19日 「狩野松之丞止宿」
- 8月28日 「瀬尾宗覚、林意泉、長崎徳庵、松永道樹、狩野松之丞」
- 9月 6日 「狩野松之丞」
- 9月10日 「狩野松之丞」
- 9月13日 「狩野松之丞、瀬尾宗覚、越九愍」
- 9月17日 「狩野松之丞」
- 9月18日 「今日為松茸狩鳴瀧御屋敷へ御成、戌ノ刻許還御、狩野松之丞、越九愍、徳岡造酒佑、瀬尾宗覚、秦九琳被召来也」
- 9月22日 「山中へ御成、為御伽、越九愍、瀬尾宗覚、秦九林、狩野松之丞、伊藤宗泉、徳岡造酒佑」
- 10月25日 「伊藤宗泉、越九愍、狩野松之丞、秦九琳」
- 11月 1日 「室津雅楽頭、高橋数馬(中略)狩野縫殿、同松之丞(後略)」

11月 9日 「狩野松之丞、瀬尾宗覚」  
 11月18日 「(前略)為御伽、伊藤宗泉、越九愍、秦林、狩野松之丞(後略)」  
 11月24日 「(前略)為御伽、越九愍、狩野松之丞、立入左京、徳岡造酒、三輪都、吉之都」  
 12月 3日 「安宅吉之丞、狩野松之丞」  
 元禄4年(1691)  
 2月17日 「安宅吉之丞、瀬尾宗覚、狩野松之丞、三輪都、秦九琳、越九愍」  
 2月26日 「瀬尾宗覚、狩野松之丞、越九愍、安宅吉之丞、徳岡造酒」  
 3月 7日 「狩野松之丞、越九愍、徳岡造酒佑」  
 4月 6日 「瀬尾宗覚、越九愍、狩野松之丞、立入河内守」  
 4月13日 「瀬尾宗覚、越九愍、狩野松之丞、立入左京進」  
 4月17日 「狩野松之丞、越九愍」  
 4月18日 「御伽瀬尾宗覚、北野主殿、越九愍、狩野松之丞」  
 7月10日 「狩野松之丞瓜壺籠持参」  
 7月17日 「狩野松之丞依召来」  
 8月13日 「依召狩野松之丞、越九愍、三輪都、政都、瀧都、立入河内左京来ル」  
 8月18日 「依召狩野松之丞、同越九愍来ル」  
 10月19日 「依召狩野松之丞、座頭三輪都来ル」  
 11月12日 「狩野松之丞来」  
 11月18日 「依召立入河内守、瀬尾宗覚、狩野松之丞、瀧都、三輪都、徳岡造酒」  
 12月18日 「田中筑後方へ御成、右者御方違ニ付而御成、夜更還御、御伽瀬尾宗覚、狩野松之丞来ル」  
 元禄5年(1692)  
 1月 9日 「立入河内、瀬尾宗覚、北野主殿、狩野松之丞依召来ル」  
 1月11日 「狩野松之丞依召来ル」  
 2月16日 「柴崎五左衛門依召来ル、狩野松之丞」  
 2月23日 「狩野松之丞依召来ル」  
 3月 6日 「狩野松之丞」  
 4月15日 「狩野松之丞為御見廻来ル、則御対面」  
 7月15日 「今日為御礼参上之人々(中略)狩野松之丞(後略)」  
 10月23日 「(前略)瀬尾宗覚、狩野松之丞来」  
 11月 2日 「狩野松之丞依召来ル、於御前扇子絵被仰付」  
 12月 9日 「歳末之御祝儀之覚(中略)一金子百疋 狩野縫殿助江一八木五斗縫殿弟同松之丞江」  
 12月30日 「狩野松之丞、歳暮御礼御祝儀拝領御礼来」  
 元禄6年(1693)  
 1月10日 「御伽越九愍、狩野松之丞(後略)」  
 1月17日 「越九愍、狩野松之丞依召来ル」  
 5月13日 「狩野松之丞来、是昨日南都より帰宿ニ付為御機嫌窺来、則御前被召出御料理則御相伴被仰付也」  
 7月12日 「狩野松之丞、南都上着之由」

7月17日 「及薄暮狩野松之丞依御契約被来、尤御対面、於御前御酒被仰付也」  
 7月25日 「狩野松之丞、中星昌需、立入左京、同数馬右行列為物見来」  
 7月27日 「狩野新三郎、立入左京、狩野松之丞(後略)」  
 8月 2日 「外良餅五棹狩野松之丞より献上也」  
 9月 9日 「今日御礼之公家衆并武家衆(中略)地下之輩(中略)狩野松之丞(後略)」  
 9月14日 「今夜御伽立入河内守、秦九琳、狩野松之丞、尾形真省、座頭政都、織部、狩野新三郎来、夜半之節座頭福長来」  
 11月25日 「今日為御祝来人々(中略)狩野縫、殿同松之丞、同新三郎(後略)」  
 12月16日 「狩野松之丞、尾形深省、立入河内守、瀬尾全庵」  
 12月18日 「今日為御悦来人々(中略)狩野永納、同縫殿助、同松之丞、同新三郎等也此外御出入之輩(後略)」  
 12月26日 「歳末為御祝儀金子百疋宛法橋意泉(中略)狩野松之丞(後略)」

### 史料3

『御室御記』(仁和寺)

元禄4年(1691)

7月22日 「御対面、狩野縫殿、敬甫、安□、盆御礼来ル」  
 9月22日 「狩野縫殿、松之丞、□樹来」  
 9月25日 「狩野縫殿来、絵被仰付」  
 9月26日 「狩野縫殿、松丞兩人来」  
 9月27日 「狩野縫殿来」  
 9月29日 「狩野縫殿」松丞来」  
 9月30日 「縫殿、松丞来、今日迄ニ絵仕舞申也」  
 10月 2日 「狩野縫殿、松之丞来、押絵等被仰付」  
 10月 7日 「狩野縫殿、同松之丞金子被下」  
 10月11日 「狩野松之丞先日為御礼来」

### 註

- (1) 五十嵐公一『京狩野三代 生き残りの物語—山楽・山雪・永納と九条幸家』吉川弘文館、2012年。なお、本論での狩野山楽、狩野山雪、狩野永納、九条幸家に関する内容はこの拙著に出てくるので、これ以降は註記しない。
- (2) 土居次義「実相院の狩野永敬」(『美と工芸』159、1970年)など
- (3) 五十嵐公一「狩野永敬の研究」『鹿島美術研究年報』18、鹿島美術財団、2001年

- (4) 例えば、次のような研究がある。岩田由美子「近江の画人高田敬輔再考—仁和寺蔵『御記』による知見を手がかりとして—」『滋賀県立近代美術館研究紀要』4、2002年。太田彩「近世宮廷美の担い手とその底力—旧桂宮家伝来の作品を通して—」『京都御所ゆかりの至宝—甞る宮廷文化の美—』展図録、京都国立博物館、2009年。薄田大輔「作品紹介 関地蔵院本堂天井画・狩野永敬と一八世紀初頭の京狩野家について」『学習院大学人文科学論集』19、2010年。脇坂淳『京狩野の研究』中央公論美術出版、2011年。市川彰「狩野永敬筆「十二月歌意図屏風について～平成21年度修繕報告を兼ねて～」」『朱雀』23、2011年。奥平俊六「実相院の襖絵」『京都 実相院門跡』思文閣出版、2016年
- (5) 木村重圭「徳融寺（奈良市）の障壁画—狩野永梢・勝山琢眼の襖絵—」『日本美術工芸』571、1986年
- (6) 五十嵐公一「狩野永納と二条家」『美術史論叢』21、2005年
- (7) 脇坂淳『京狩野の研究』中央公論美術出版、2011年
- (8) 土居次義『山楽と山雪』桑名文星堂、1944年
- (9) 井上敏幸「狩野永納『鳥跡記』—解題と翻刻—」『香椎潟』37、1992年
- (10) 「鳥跡記」を収める『文苑雜纂』は抜書本である（松野陽一「『落穂集』（南部家本）の翻刻と解題—元禄期江戸雅文壇資料紹介—」『国文学研究資料館紀要』16、1990年）。
- (11) 土居次義『山楽と山雪』桑名文星堂、1944年。五十嵐公一「狩野永納と二条家」『美術史論叢』21、2005年。なお土居次義『山楽と山雪』に、常貞は元禄7年（1694）8月23日に没したとある。
- (12) 永納は京狩野家の当主ではなくなり、隠居という立場になったが作画活動を続けた。これ以降、「一陽齋」と号するようになる。
- (13) 『二条家内々御番所日次記』の一部は東京大学史料編纂所にもあるが、そこに永敬の記録はない。永敬の記録があるのは慶應義塾図書館本だけである。
- (14) これは五十嵐公一「狩野永納と二条家」（『美術史論叢』21、2005年）でも注目したもののだが、永梢を考える記録として修正を加えた上で再び取り上げる。
- (15) 『二条家内々御番所日次記』元禄6年（1692）12月9日には「歳末之御祝儀之覚（中略）—金子百疋 狩野縫殿助江、一八木五斗 縫殿弟同松之丞江」とある（図1）。ここに「縫殿弟」つまり永敬の弟が「松之丞」だとある。因みに、「八木」は米のこと。
- (16) 五十嵐公一「狩野永納と二条家」（『美術史論叢』21、2005年）では、木村何遠を京狩野家の有力な画家だとした。しかし、この木村何遠が永梢である可能性を想定するわけである。
- (17) 五十嵐公一「乾山の一記録」『乾山の芸術と光琳』展図録、NHKプロモーション、2007年
- (18) 木村重圭「徳融寺（奈良市）の障壁画—狩野永梢・勝山琢眼の襖絵—」『日本美術工芸』571、1986年。この襖絵は、滋賀県立近代美術館と栃木県立美術館の共同企画展「高田敬輔と小泉斐—近江商人が美術史に果たした役割」（滋賀県立近代美術館、2005年）でも展示された。
- (19) 『二条家内々御番所日次記』元禄6年（1693）五月十三日条には、永梢が南都から帰京した記録がある。脇坂淳氏はこれに注目し、これが徳融寺障壁画制作と関係がある可能性を指摘する。脇坂淳『京狩野の研究』中央公論美術出版、2011年
- (20) 木村重圭「徳融寺（奈良市）の障壁画—狩野永梢・勝山琢眼の襖絵—」『日本美術工芸』571、1986年
- (21) 『彩—鶴澤派から応挙まで—展図録』兵庫県立歴史博物館、2010年
- (22) 以下に出てくる永納の作品は、『狩野永納展図録』（兵庫県立歴史博物館、1999年）に掲載されているものばかりである。
- (23) 五十嵐公一「狩野永敬の研究」『鹿島美術研究年報』18、鹿島美術財団、2001年
- (24) これらの他には、画面左端に「狩野永梢筆」の署名と「永梢之印」（白文方印）、「李寛」（朱白文方印）をもつ六曲一隻の「嵐山春景図屏風」がある。三紙を継いで画面を作った腰屏風だが、これは六曲一雙屏風の左隻だった可能性がある。桜が満開の嵐山、大堰川などが十分な空間をとって描かれている。桜のピンク、樹木の緑に加え、画面は金泥が刷かれているので、華やかな印象を与える作品である。永梢が洛外風俗の作品も描いている点には注目したい。